

【題目】祝島の神舞の伝承・保存と練塀の修復・保全

【講師】橋部好明氏

（山口県上関町・教育委員会・教育委員長、祝島神舞奉賛会・会長、広島工業大学「地域・集落計画研究センター」顧問）



Y 神舞(かんまい): 大分・国東半島の伊美別宮社の神職が、4年に一度、祝島にて報恩感謝の神樂を奉納する、千百年も続いている祭事。

Y 練塀(ねりへい): 石を2列に並べ、その間に土を詰め、軒の高さまで積み上げ、厚さ50cm程の塀、又は壁。

\* 178枚の写真を基に、以下の内容に関する講和を、自ら「スローライフ」の実践者である風情をもって、淡々とされた。

- 祝島とはどのような島か?・・・瀬戸内海には、八十島というぐらい島がたくさんありますが、山口県の瀬戸内海の西の果て、祝島を最後にあとは島がなくなります。遠くに大分県の姫島が見えますが、見えない日の方が多い。祝島から西に行くともう島がないということで、遣新羅使、遣隋使、遣唐使の皆さんが祝島にお願いして旅の無事を祈ったことから、祝島という大変縁起のいい名前をもらっています。祝島は、日本最古の万葉集に出てきます。集落の面積は28.4ha、周囲は3里（12km）です。その小さい島の中に、一時は5,000人近い人が住んでいたのですが、今はどんどん減り、現在は約500人です。約1年で25名位が亡くなっていくので、このまま推移していくと10年で250人、次の10年で500人がなくなっていくので、後どうなるんだろうと、ちょっとミステリアスなことを想像してしまいます。そういう過疎の島になりかけていますが、「祝島未来航海プロジェクト」など、島を再生しようという思いは住民の皆さんが沢山持っていますので、森保ゼミの研究成果をもとに、島づくりに励んでいこうという思いです。
- その上で、地理・立地、海・海の幸、鳥、山の幸、果実（ビワ）、産物（トウフ・ほか）、養豚、等々について説明。更に、石垣、平さんの棚田、ほかの説明もされた。
- 集落調査、練塀・・・練塀は、2個の石を幅50cm、高さは軒まで積み上げたものです。形としては、①そのまま積み上げたもの、②ちょっと大き目の基礎石の上に重ねたもの、③石垣の上に練塀をつけたものの3種類があります。練塀の役目から見ると、大きく、（1）屋根を支える壁型、（2）仕切りの役目をしている塀型の2種類があります。壁型は、屋根を支えるので石も大きいし、しっかりした骨組みがされています。塀型は、単に家の間仕切りというか、所有権をあらわすためですから、石もあまり大きいを使っていないし、積み方もやや雑です。練塀がいつごろから築きだされたのか、私どもの今までの研究で解明されていない部分ですが、200年以前ぐらいから後ではないかと思いますが、最近気がついたことですが、練塀は解いてしまうと元に戻ってしまって、跡形もなくなります。だから、かなり昔からあったのではないかとも思いだしています。
- その上で、第1次練塀フォーラム、第1次練塀修復、国内の練塀事例調査、国外（海外）の練塀事例調査、等々について説明。更に、第2次練塀フォーラム（講演会）、第2次練塀修復についても説明された。
- 神舞・・・神舞は、今から1124年前の886年に、豊後の国、伊美の人々が山城（現京都府）の石清水八幡宮の神様を奉持して、海路を下向中に嵐に遭い、祝島の三浦湾に漂着した時に始まります。伊美の人たちの先祖は祝島の人に命を助けてもらい、祝島はお礼に農耕の術を教えてくださいました。それから農耕の神様をまつようになり、穀物がとれ出して、生活の水準が一気に高まったと言われています。昔は魯をこぎ、帆を立てていったと思いますが、九州までお礼に行く「お種戻し」の行事を毎年欠かすことなく、1100年の歴史をもって続けています。4年に1回、伊美別宮社から20余名の神職、楽師を迎え、祝島を斎場として開催する合同祭事「神舞」の時には、3隻の船を連ねて九州までお迎えに行きます。この祝島の神舞は、平成16年に「むらの伝統文化顕彰」で農林水産大臣賞をいただきました。平成18年には、「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に農林水産大臣から認証いただいています。この陰には、森保ゼミによる練塀の調査の成果もあります。
- その上で、集落を挙げての準備、各種行事、等々について説明。
- 神舞行事と祝島の住民との関係・・・小さな島の大きな祭り、神舞。1000年余の昔、浜辺での心温まる出会いから始まった神舞。伊美の人々にとっては命の恩人、祝島にとっては生活の糧をもらったという恩。お互いが相手の先祖に対して、はかり知れぬご恩の念を抱いてきました。それが幾多の困難にもめげず綿々と語り継がれた原動力。1000年という時空を越えて伝えられる神舞、それを守ってきた祝島。神舞は祝島の人にとって大きな誇りなのです。
- 祝島の神舞の伝承・保存、そして、練塀の修復・保全、共々に大事にしているのが、私達の祝島集落です。



橋部氏：講話風景

以上

**【題目】瀬戸内の島嶼集落研究への期待**

**【講師】住田昌二氏** (大阪市立大学・名誉教授、広島工業大学「地域・集落計画研究センター」特別顧問)

- 21世紀社会のキーワードとして、「サステナビリティ」と「スローライフ (エコライフ)」が挙げられる。資源の有限性に基づく、生活・ものづくりの作法が、祝島集落とそこでの生活に、彷彿としてみられる。
- 瀬戸内の島嶼の研究的魅力は、「やりがいのある研究」、「楽しい研究」である。
- 島嶼研究の視点として、「個々の島嶼の個性の把握」、「歴史的に蓄積された島嶼地域の相違による、サステナビリティ構造の把握」、等々がある。
- 森保チームの集落研究は、島嶼の比較類型化への発展として、「祝島の研究」からスタート、「宮島、御手洗、平郡島、沖家室など」の集落へと研究対象を発展させてきているものと云えよう。
- 森保チームによるサステナビリティ研究の成果として以下の事が云えよう。つまり、祝島は、瀬戸内海の孤島で、わずか7.67km<sup>2</sup>の面積でありながら、漁業ではなく、農業を基本産業として、約500戸の世帯を支えてきた。そこには、以下に要約される生活の知恵が生み出したサステナビリティの技術の伝承があった。

1) 集落の空間構造・・・「練塀」と「路居」

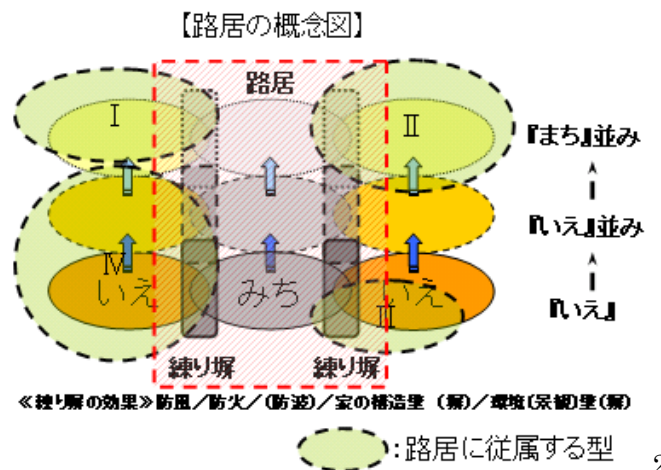
・集落の基本インフラ・・・練塀一石ころ、土→版築構造、練塀による「家」と「路」の関係

2) 住宅の構造・・・

徹底した「古材活用」、住宅は、基本的には農家、間取りは、「田の字型」が基本、民家型と数寄屋型のミックス特に、住宅の構造の「軸組み構法」と「組積造」とがあるが、わが国の多くは「軸組み構法」、しかし祝島では、練塀により、「組積造」の様相を呈している。また、家と庭については、「外庭型」と「内庭型」とがある。わが国の多くは「外庭型」であるが、祝島では、「路居」の形式により、「内庭型」に近い住宅がみられる。

3) 社会構造・・・「土地均分制」が基本→母系制に基づいた多子相続、均分相続、「株内」「惣」「講」などの生活互助組織、「均分」「協働」「合議」から成る「自治社会」

4) 文化構造・・・結衆の原点としての「神舞」の神事、「出稼ぎ人」「出郷者」の心の支え、「往来」と「出稼ぎ」の歴史→「開かれた社会」



■島嶼研究の社会的還元として、「集落空間の継承的発展」(集落の空間構造の継承…修復と再生、ほか)、「島嶼の担い手の確保」、「島嶼ネットワークの構築」(研究ネットワーク、島嶼間交流ネットワーク、ほか)が重要であろう。

【注1】路居に従属する型が、多数あり、門(かど)という前庭空間、背戸(せど)という勝手口・裏庭空間をもつ形式が多い。

【注2】結果的に、ここでの路居という形式は、中庭型の住居をもつ場合が多い。



住田氏：講話風景

以上

〔講座・会場〕 広島工業大学・地域環境宮島学習センター：通称「宮島こもん」(旧・佐々邸)  
〔同時開催行事：土間パネル展〕・・・パネル説明・・・ 〔参加者数〕 42名(定員25名)

《記録：森保洋之》